



平成 26 年 4 月 15 日 発行 第 15 号

目次

1. 巻頭言
 2. 陶芸家のひとりごと
 3. 陶芸道中いざ凝り気
 4. 私の作品自慢
 5. 活動報告
 6. 会員便り
 7. 編集後記
- 付録 1 会報 投稿のしおり
付録 2 会報 原稿執筆要領

編集委員会

委員長 森田 隆司
委員 片岡 俊彦
佐武 洋祐
曾根 恭子

巻頭言

会報「炎 HOMURA」

陶と人を結ぶ

会長 森田 隆司

全国各地で陶芸を楽しまれている方々、京都近郊に居住されている方々、そして京都を拠点に活動する我々清水焼団地の作家。一堂に会する機会は年数回と限られています。あるいは遠隔地でお会いできない方々もおられます。倶楽部会報が何かのお役に立てないものか？と考えるとき、それは会員の皆様を「結ぶ」ということではないかと思えます。陶芸という共通世界の中で、記事を通して互いを知る機会を得る。それが倶楽部会報の目指すところだと思います。新たな活力となるような「京都・やきもの倶楽部会報」を作り上げていきましょう！

さてこの度、平成 20 年の創刊から年 2～4 回発行されてきました会報「炎 HOMURA」は 15 号を数え、新たにカラー版として、内容の一部を刷新いたしました。これまで誌面づくりにご協力いただいた皆様には厚くお礼を申し上げます。今後もこの会報がやきもの倶楽部の交流の一旦を担い、会員皆様にとっての身近な陶芸通信として、お役立ていただけるような誌面づくりを目指してまいります。

つきましては、陶芸にまつわる投稿・寄稿、展覧会レポート、会員便り、公募展入選・入賞情報など、多岐に亘る原稿と情報を募集いたします。日頃の作品制作の中で気づかれたこと、発見！疑問？など数々おありのことと思えます。それらを寄稿いただき、共に「陶」への想いを綴り上げたいと考えています。皆様の交流と研鑽の場としての会報「炎 HOMURA」へのご協力をよろしくお願いいたします。

今秋 11 月、「第 2 回京都・やきもの倶楽部作品展」を清水焼団地内「清水焼の郷会館」1 階展示場（平成 25 年 10 月オープン）にて開催することが決まりました。出品要領などの詳細については、5 月に「作品展応募要領」をお送りいたします。

皆様奮ってご出品いただきますよう、お願い申し上げます。



清水焼の郷会館 全景

いて欲しいという依頼をいただきましたので、僭越ながら書かせていただきます。



ケルンでの展示会風景



清水焼の郷会館 1階展示場

まず、私の旅程について触れておかねばなりません。私は、どうせ行くならケルンとパリ以外にも行きたい！という思いを抑えきれず、ケルンに行く1週間ほど前にローマへ渡り、そこからフィレンツェ、ヴェネツィア、と一人で回ってから、清水焼団地の皆さんと合流しました。この記には、それぞれの国についての雑感を書かせていただきたいと思います。

イタリアは、この度訪問した3カ国の中で一番経済的に厳しい国です。随所にそのことは感じましたが、歴史を一番感じさせてくれる国でもありました。美術館にもたくさん行きました。ローマなどでは街をブラブラしているだけで2000年前とほぼ同じであろう風景に出会えたりするなど、古いもの好きにはとても魅力的な街でした。ただ、愛国心が強く、他国の文化をあまり受け入れないところは、陶器の市場には向いていないのかな、とも感じました。

陶芸家のひとりごと

ヨーロッパ遠征

陶芸家 清水 大介*

2013年6月、京都市とケルン市の姉妹都市提携50周年のイベントの一つとして、ケルンにて清水焼の展覧会を行いました。さらに巡回してパリでも展覧会を行いました。私はどちらにも作品を出品し、また現地に行ったことで大変貴重な体験をさせていただきました。そのときのことを書



ローマ、フォロ・ロマーノ

ドイツは、イタリアと正反対でとても近代的な国です。戦争で一度街が焼けたことも原因の一つなのでしょう。合理的な考え方は器に対しても表れていました。食洗機対応、スタッキングできる、基本的に磁器を好むなど、機能面を重要視する人が多いような気がしました。

ケルンに関しては小さな街でしたが、話を聞くうちに、「ドイツ」という国に個人的にとってもチャンスを感じました。



ケルン大聖堂

パリは、ヨーロッパのアートが集まっている街だと言われています。今回は日程的にあまりじっくり見て回ることはできなかったのですが、ぜひ近いうちにまた訪れてみたいと思っています。展示会でも、かなり多くの方に来場いただき、改めて日本文化に対する興味の深さを感じました。

今回の海外遠征で私が特に実感したのは、日本の焼き物の奥行きのは広さは間違いなく世界で一番だということです。ただ、その価値観は世界基準でみるとかなり特殊です。そのことはまず自覚する必要があります。和食がユネスコの無形文化遺産に登録された今、食に欠かすことのできない器を、食と絡めてどう発信していくか。日本の器を世界のスタンダードとしていくためにどうすべきか。そういったことを考えながら、来年はフィレンツェを舞台に何かをしようとして動き出しています。日本の焼き物文化を世界に。やきもの倶楽部にもまた何かよいご報告ができるようにがんばります。



フィレンツェの街並

* 清水 大介 (キヨミズ ダイスケ)

Shop & gallery 「トキノハ」を運営

URL: <http://tokinoha.jp/>

陶芸道中いざ凝り気

アマコンの思い出

会員 片岡 俊彦

平成 14 年から陶芸を初めて満 12 年になる。私は当年取って 68 才の老人である。その間、「京都・やきもの倶楽部」の前身である「京都・陶芸アマコン」には大変お世話になり、同時に陶芸を志す原動力にもさせていただいた。私の創作活動の歩みについて語ってみたいと思う。

昭和 40 年代、学生の頃には美術部に所属し、絵を描いていた。絵画といっても、当時盛んだった前衛絵画にあこがれていた。中でも、戦後に生まれた「具体美術」という集団に魅せられ、大阪中之島近くの土蔵を改良して作ったギャラリー“グタイピナコテカ”に常設されていた作品をよく見に行ったものである。前衛芸術というものは、

何の制約もなく、人間の感性の赴くまま自由に制作して下さい、ということだと理解していた。そうすると、その作品は、見る人によっては「汚い」と感じる場合もあれば、「綺麗」と捉える場合もあるはずであるが、この具体グループの作品は私にとって、いつも、どれもが綺麗に見えていたのである。つまり、芸術という創作活動は、何をやっても良いのであるが、作者にとって「綺麗」でなければならないのだと悟った。この頃の経験が、今の私の陶芸の原点になっている。

学生時代は終わり、そのまま大学に勤めることになった。仕事は理系の教育と研究である。これを境に芸術とはまったく縁のない世界に入っていく。しかし、よく考えてみると大学での研究というものは、芸術と同じで、何をやってもよいのである。テーマは自由に選べるわけで、感性の赴くまま、世の中の役に立とうが立つまいが、すべてのことが許される。しかし、その結果に対して称賛を得るためには、ただ一つ、人の真似をしないということが大切である。研究者であったこの頃は、自分のオリジナリティ探しの時代であった。このことも、私の陶芸に繋がっている。

長い大学生活も停年近くになって、作品作りを再開しようという気持ちが次第に強くなってきた。学生時代には、ベニヤ板3枚を合わせた木組みのキャンパスに、当時開発が進んで綺麗な色が出せるようになったペンキを使った絵や、ベニヤ板で幾つもの大きな箱を作り、それらを繋ぎ合わせたオブジェも作っていた。そのせいもあって、立体の作れる焼き物と、いろいろな色と形を表現できる絵画を組み合わせてみようという気になった。

まずは、陶芸教室探しから始まった。幸い、私の娘の知り合いの紹介で、滋賀県の草津にある教室に入門することとなった。その教室では、最初から電動ロクロ、真空土練機、圧延機での作業から始まった。つまり、ひも造り、菊練り、タタラ造りは、「すべてしないでよろしい」ということであつた。実は、私のように体力のない者にとっては、また、機械いじりの好きな者にとっては幸いであつた。テニスを始めた人が、「最初はいつまでも球拾いをさせられる」と嘆いていたが、もつての外で、ここでは第一日目から電動ロクロを使わせてもらった。師匠に作り方の手本を見せてもらったなら、それができるまで真似をする。これが基

本であつた。土の上げ下げから始まり、玉づくりでのぐい飲みや茶碗、くったちから花器、壺、瓶、皿というように、大方の陶作りを教えてもらった。「くったち」というのは円筒型の入れ物のことで、本当にそう呼ぶのかハッキリしない。師匠はそう言っていたような気がする。

ロクロでの基本はくったち作りで、私の場合は左手の人差し指と中指、右手の中指で土を上げてゆく。ここで、もし両側の指で土を挟み込んでしまうと、必ず土の厚みにムラができ、突如として土全体が揺れ出す。こうなったら、もうおしまいで、新しい土と取り替えるより仕方がない。ところが、師匠は、土がどんなに揺れていても、いとも簡単に修正してくれる。この技術はまさに神の手のなせる技である。この師匠の癖は、ロクロを挽いているとき、ロクロの回転に合わせて首が左右に振れることであつた。このことが頭にあつて、以前に森田先生のロクロの実演を見せていただいた際も、先生の首もこころなしか振れていたように見えた。これぞプロかと感心した。

こういった修行を3年ほど積んだ頃、ようやく作品展に出せる程度の大きさまで作ることができるようになっていた。教室には、よくある腰掛け式のロクロと職人さんの使うあぐらを組んで座るロクロがあつたが、この頃にはあぐら式の方に座ることも許されていた。さらには、師匠の手伝いで、近くの大学の学園祭に出した露店でロクロの実演もさせてもらった。というより、師匠の横でさくら役をやっていた。

公募展のアマコンがあるのを初めて知ったのは、平成17年の「第6回陶芸アマコン大賞」だった。確か、教室においてあつた募集要項を見たのだと思う。入選の確率が高くなるだろうと思い、2つの作品で応募した。それが写真の「夢壺」と「蘭鉢」である。一つは入選したが、一つは落選だった。

「夢壺」は、当時ロクロで作ったものの中で最大級の大きさだった。実を言うとロクロを轆いているときに、土が腰砕けになりかけて、チョットだけ師匠に手伝ってもらった。この頃から、作品は、黒の線引きの中に色をはめ込むというやり方になった。「蘭鉢」は、学生時代の“前衛”が息を吹き返した作品である。真ん中の胴も4つの腕もロクロで作った。腕の方は、ロクロを回しながら



「夢壺」 幅:20×奥:20×高:22 (cm)
第6回 陶芸アマコン大賞 入選



「蘭鉢」 幅:30×奥:30×高:22 (cm)
第6回 陶芸アマコン大賞 落選

断面が四角の管を丸く曲げて繋いだ輪に作り上げ、後でその一部を切り出して胴にくっつけたものである。この中空の輪の作り方は、師匠に教えてもらったやり方で、口では簡単に説明できないが、色々なことに利用でき、便利である。

翌々年になるが、平成19年「第7回京都・陶芸アマコン大賞」にも応募した。どうもこの年から名前の頭に「京都」が付けられたようである。作品には、「イメージ『祭り』」という名前を付けて出品した。この年の作品をオブジェにしようと決めたのは、前年度のアマコン大賞が、表面の1つの角が少しめくれ上がった立方体を沢山集めてくっつけたオブジェ作品であって、自分も気に入っていたからである。オブジェも賞をもらえると言うことに期待してはいたが、まさか今回の作品が創作部門の大賞に選ばれるとは夢にも思ってい

なかった。電話で知らせを受けたのは私の娘で、勤め先から家に帰ると、「何かわからんけど、電話がかかってきて作品が入賞したから授賞式に来て下さいと言ってはったで」と伝えてくれた。びっくり仰天である。残念ながら、作品展の授賞式には仕事の都合で出席することができなかったが、この受賞の思い出は、陶芸の世界でもオブジェはあるのだと勇気付けられた最初である。



「イメージ『祭り』」
幅:25×奥:25×高:30 (cm)
第7回 京都・陶芸アマコン大賞
創作部門 大賞

その年が明けて平成20年2月には「京都・やきもの倶楽部」が設立され、総会及び懇親会が開催された。いよいよ京都・やきもの倶楽部の活動が始まったのである。4月には「第1回交流会」がもたれた。この交流会の席で、出席しておられた林康夫先生とお話することができたのは、陶芸のことなど何も知らなかった私にとって大変なインパクトであった。というのは、前年に大賞を頂いた後、どなたが審査員だったのかをWEBで調べた時に林先生の名前や作品を見ており、ずっとオブジェを作り続けておられることを知っていたからである。その作風から、きっとこの先生が自分の作品に高得点を入れて下さったのだろうと勝手に思いこんでいた。懇親会の間、先生のお若いときの話をしていただき、前衛陶芸に対する先生の熱意がひしひしと伝わってきた。前衛陶芸の最初は「四耕会」というグループから始まり、そ

の後、「走泥社」が結成されたという。先生はその四耕会の中で最年少の若手として活躍された。先生の作品は海外で高く評価され、多くの賞を受けておられる。こういった話を聞くに付け、ますます、前衛陶芸を続けていこうと思った。すでに私の年齢は還暦を越えていたのだが。

振り返って考えると、学生時代にあこがれた前衛絵画の具体美術も、年を取ってから知った前衛陶芸の四耕会、走泥社も、私の生まれた昭和20年という戦後に、しかも大阪、京都という関西で生まれたグループであった。このことは、何か自分との深い因縁を感じざるを得ない。

さて、私の陶芸人生も、次第に目標が定まってきた。「誰も作ったことのない新しいもので、色や形が綺麗で、バランスが取れたもの、そして大きなもの」を作ろう（開発しよう）と考えた。この頃から下絵の色数も増やし、もっと華やかな感じの出た作品を作り、「第8回京都・陶芸アマコン大賞」にも出品しようと頑張った。しかし、このもくろみは失敗の連続だった。ほとんどの場合、粉末の下絵の具を水に溶き、濃く塗りたいために重ね塗りをするのであるが、釉薬をかけて本焼きをすると、釉薬が絵の具ともども剥げ落ち、見るも無惨な作品に変わり果てるのである。特に、赤色の絵の具が問題であった。これを解消する方法は、ずっと後になって会長の森田先生から教えてもらい、今では失敗する率は相当低くなっているのであるが、当時はどうしてよいか判らず、少し方法を変えては神頼みを繰り返した。アマコンの締め切りが迫っている中で、2つの作品を焼くことになったが、窯焼きの都合で、窯出しは申し込みの締め切り前日という事態になった。その当日になって、案の定、1つ目は失敗。さて2つ目はというと、「あ～、入れるの忘れてた」という師匠の言葉。こういうことでアマコンはパスせざるを得なくなり、これを機に陶芸教室も辞めることにした。足かけ7年間の修行であった。師匠に感謝。

この後、半年間ぐらいはぶらぶらと過ごしながら、インターネットで次の陶芸教室を探すしかなかった。窯を持たない陶芸家？の悲哀である。

余談であるが、陶芸を始めた頃、窯を自分で作ってやろうと考えたことがある。多分、昔あった雑誌の“つくる陶磁郎”に載っていた記事だと思うが、板橋廣美氏の手作りガス窯として設計図が

載っていた。さらに参考として英訳の本が紹介されていた。今も持っているが、“BUILDING YOUR OWN KILN”という題名の本で、すぐに購入した。どうせやるなら完璧に！という悪癖が出た結果である。窯の大きさは、正面が500mm×500mmで、奥行きが1000mm程度のガス窯であった。さらに、家を建てたときには、屋外にガス栓を作ってもらったことまでした。しかし、建った家の庭は狭く、窯を作っても置く場所がない、無理に置いたとしても我が家も隣も燃えてしまうかも知れないということになり、結局は断念した。窯作りは取りやめになったのであるが、その構造や火の回り具合について色々勉強することができたと思っている。

次の陶芸教室は、「もう教えてくれなくてもよいから、作る場所を貸してもらえて、後は焼いてくれるだけでよい」と生意気なことを考えていた。最初に訪ねた教室は、食器などの実用品を作る傍ら、陶芸教室も開いているという所だった。自分の希望を言うと、「私の所は、そんなことはようしまへん」とけんもほろろに断られた。そんなこともあって、二軒目は、「ここではどんなことをさせてもらえますか」と低姿勢に出たところ、「どんなことと言うても、何でもやってもよろしいで、聞いてもうたら教えますさかい」という返事だった。これで二人目の師匠は決まりだった。ここでは、本当に自由にさせてもらっている。昨年は自分の作品で窯を独占させてもらったこともあ



「華 43」 幅:42×奥:26×高:3 (cm)
第9回 京都・陶芸アマコン大賞
創作部門 努力賞

る。師匠とは、生き方から政治のことまで非常に意見が合う。なんと言ってもお酒好きなところがよい。

ここで作った作品は平成 21 年「第 9 回京都・陶芸アマコン大賞」で努力賞を頂いた。作品名は「華 43」とした。この作品は、写真で判るように色々な大きさの矩形の板がランダムな段差を付けて並んでいるもので、個々の板に絵付けがしてある。板をランダムにぎっしり並べるのは工夫が必要であったが、釉薬と絵の具が剥げることなく、仕上がりは上々であった。

アマコンは平成 22 年の第 10 回を最後に幕を閉じた。その間、私はここに上げた 4 つの作品を出品させてもらった。他の公募展に出した作品は一つもない。本当にお世話になったと思っている。アマコンを設けられた著名な陶芸家の諸先生方、作品展を毎回成功させるために頑張ってくれた若い陶芸家の方々、ありがとうございました。



人生初めての陶芸作品

大路の営業所でありました。仕事はそれなりに多忙でしたが、土曜の午後や、日曜、祭日は休めましたので、余暇は十分とれました。そんな折、先輩から「お茶を習わへんか？」と誘われ、時間もありますし、かねてから興味もありましたので、二つ返事でお茶を習い始めました。その教室は若者が中心で、最年長は三歳年上の、私を誘ってくれた先輩で、他にも男性は 4、5 人おりました。

先生は、裏千家できちっと修業された方で、凛とした、和服を着こなした立派な先生でありました。稽古は土曜日の午後を開かれ、基本に厳しくはありましたが、細かな点にはこだわらない、自由で、居心地のいい空間であったと記憶しています。教わる内容も、お点前作法だけでなく、日曜や、祭日に、「裏千家・今日庵」の見学や、漆芸家など工芸作家の工房探訪、お茶会への出席、また自分たちで、妙心寺や相国寺の塔頭などお借りして、お茶会を開くなど、総合芸術としてのお茶の体験をさまざまな角度から経験させて頂きました。

その一環として、先ほど申しました「陶芸体験」があったわけですが、土を粛々と積む作業は時間を忘れる楽しさで、土を削る感触も何とも言えず楽しく、作品が焼きあがってくるまでのワクワク感も楽しいものであったと思い出します。とはいえ、駆け出しのサラリーマンには、陶芸をそのまま趣味として続ける「お金も暇も」ありませんから、尾形周平先生とは文字通り「一期一会」のご縁でありました。

ただこの陶芸体験から、その後の陶磁器を見る目が明らかに変わりました。特に土ものに愛着を感じて、骨董街のウインドーショッピングをした

私の作品自慢

陶芸と私

会員 杉原 精二

私の初めての陶芸体験は今から 40 数年前になります。京都・今熊野近くの、確か「周平窯」という名の尾形先生に教わったと記憶しています。たった一度の体験でしたが、その日一日で、抹茶茶盃の成型から、削り、呉須の絵付けまで施しました。後日、志野風の釉薬のかかった初めての作品が届きました。手前味噌ですが、初めての割には良く出来た一品と気に入り、今もなお、大切に使っております。

この陶芸初体験は、私の新入社員の頃でした。会社は大阪に本店がありましたが、最初の配属は、たまたま実家から徒歩で 10 分ばかりの京都・北

り、デパートのギャラリーを時間があれば覗いて見たりと、積極的に楽しむようになりました。そしてその頃、民芸運動でも著名な「河合寛次郎」、書家であり篆刻家、料理家でもあった「北大路魯山人」、走泥社の「八木一夫」、染付の「近藤悠三」、華麗で典雅な「楠部弥一」、歴代の「楽家」や「永楽善五郎」など、京都に縁の深い陶芸家の作品に触れる毎に、「作家にもいろいろな方がおられ、その作風や技法は奥が深く、幅も広いものだ」と思い知らされました。それぞれの陶芸家の個性の豊かさやその作品にすっかり魅了されました。

一方で、仕事は本店に転勤となり、朝も早く、帰りも遅くなりました。さらに結婚するに至って、京阪樟葉にあった社宅に入居しましたので、京都とも少し遠くなり、加えて家事都合も忙しくなり、気がつけば、茶道教室とも疎遠となっていました。それでも陶磁器の鑑賞は、機会を見つけてポチポチ続け、信楽や立杭などへも足を運び、家内とともに楽しんでいました。

そして十数年、私は転勤で、若狭へ単身赴任となりました。単身赴任の夜は暇ですから、ついつい酒量も増えて、その頃γ-GT 値は急上昇です。そこへその町に「今谷窯」という、登り窯も備えた立派な陶芸館が出来ました。平日の夜に、陶芸教室も開かれるということで、迷わず入門致しました。そこで最初に作ったのは円筒形の筒でした。その筒を作ることで、土の積み方の基本を教わったように思います。焼成した筒は、湯呑でも、お湯割りでも、筆立てでも、何にでも使えましたが、私は会社の机の上の筆立てとして長く使っていま



日頃愛用の自作の酒器たち

した。今でも作業場の筆立てとして重宝しています。

そうこうして、また若狭から本店に戻りました。陶芸教室は一年ばかりでしたが、私の家の川西市と若狭は車で2時間ばかり、さほど遠くもありません。陶芸の魅力は忘れ難く、年に1,2度の登り窯に合わせて、「好きなものを、好きなように」作って楽しもうと決めました。焼成したぐい呑みなどは酒飲み友達に贈るとそれなりに喜ばれ、友人との関係も一層深まり、思わぬ効果もありました。

それからまた数年、会社を転籍、関係会社に勤めることになりました。いよいよセカンドライフの準備です。老後は美術館めぐりの他に、せっかく覚えた陶芸をもっと楽しまなくてはと思って、「読売文化センター」の教室に通い始め、技量向上を目指しました。そこで今井先生、市川先生、森田先生、加藤先生などの知己を得て、ご指導を得ましたが、勤務の都合や、私の情熱不足もあって、月に1,2度しか通うことができませんでした。思うほどには技量も伸ばせず、残念な思いがありました。むしろ読売では、課外授業の懇親会や、森田先生の穴窯などに参加することができ、先生方の陶芸への思いに直接触れられたこと、同じ陶芸趣味の方々との交流を持てたことを喜んでおります。この「京都・やきもの倶楽部」とのご縁も、その延長であり、私のセカンドライフに広がりをもたらしてくれています。

セカンドライフは2008年から始まりました。それからは毎日が自由ですから、私の家の小さな作業場と、若狭の「今谷窯」とを春から秋にかけて、何度も往復して陶芸ライフを楽しんでいます。もっとも冬場は雪道が怖くて冬眠をしています。その若狭通いも今年でかれこれ6年になります。教室には若狭の方はもちろん、湖北の方もおられ、皆さん明るく、楽しい方々ばかりで、お互いワイワイ刺激し合う頼もしい仲間です。

若狭以外でも、川西から北西方面に50分、「立杭の里」にある「兵庫陶芸美術館」へもよく参ります。こちらへは「やきもの倶楽部」での研修ツアーでも参りましたから、良くご存じかと思えます。ここは毎回の企画展も楽しみなのですが、企画にちなんだワークショップも開かれ、それが好評で、私も出来るだけ参加するようにしています。

活動報告

秋には登り窯も焚かれ、希望すれば 1, 2 点、窯元の指導を受けながら焼成も経験させてもらえます。こちらの登り窯には、一度しか参加しておりませんが、「窯詰め・窯焚き・窯出し」を立杭の窯元の皆さんが交替で立ち会って下さいますし、大きな窯ですから、参加者も大勢で、大変賑やかな窯になります。また参加したいと思っています。

さて「陶芸と私」という題を頂いて、40 数年前の「周平窯」での初体験から、飛び飛びの私の陶芸遍歴を書かせて頂きました。今となっては私の生活の大きな部分を陶芸が占めていることが良くわかりました。そのことは酒呑み友達やその他の友人、知人、従兄妹達も良く承知しており、皆さん「いい趣味を持ったね」と言ってくれるのですが、話ばかりでは嫌われないかと、数年前より、年末には干支の置物を贈るようにしております。その数は年々増えてきており、秋から年末は私にとって、楽しいけれども多忙な時期であります。



干支の引き継ぎ 巳から午へ

また会社の同期会の春と秋のゴルフコンペでは「優勝トロフィー」を作ることにしています。一応喜んではおりますが、本当かどうかは若干微妙です。それでもそれなりに存在感を發揮しており、一人悦に入っています。

そんなこんなでこれからも、「好きなものを、好きなように」陶芸を楽しんで参りたいと思います。どうぞ今後とも宜しくご厚誼をお願い申し上げます。

第1回 作品展 開催

開催日：平成 25 年 9 月 18 日～9 月 22 日
京都市勧業館みやこめっせ 美術工芸ギャラリー
において初めての作品展が開催された。入場者は 545 名におよび、好評を博した。9 月 19 日付け京都新聞朝刊市民版には、「陶芸 プロ・アマ“競演”」としてとりあげられ、まさに京都・やきもの倶楽部の理念が示された。詳細は会報第 14 号に掲載。

陶芸プロ・アマ“競演” 初の作品展 左 京
「やきもの倶楽部」初の作品展 左 京
清水焼団地協同組合 生かし方を考えた、(京都市山科区)の若 全国の窯場の見学をこ 手作家や全国の陶芸愛 をしている。
好家をつくる「京都・ 作品展には、愛好家 やきもの倶楽部」の初 28人と清水焼団地の めての作品展が18日、 作家8人が計64点を 左京区のみやこめっせ 寄せた。つぼとも練 て始まった。プロ、ア リの細工を組み合わ マチュアを問わず独創 せたユニークな陶箱 的な力作が並んでい や、バラの文様が美し る。 白い磁のつぼ、長刀鉢 を種菜であしらった陶 同倶楽部は、愛好家 の拡大を目指して20 板などが目を引いてい 07年に発足した。会 員は65人で、陶器に和 陶芸家の森田隆司会 長(59)は「アマの方 も窯や工房を構え、作 り家でもできる細かい 作業をした作品もあ る。力作をそろえてほ ぐ午後5時入場無料、 (片村有晃)

アマチュアの愛好家たちが作った陶芸作品が 並ぶ会場 (京都市左京区・みやこめっせ)

第1回 作品展 図録 発行

発行日：平成 25 年 10 月
作品展の図録がオンデマンド、カラー印刷で発行された。内容は、清水焼団地の陶芸家 8 人による協賛作品と会員 26 名による作品、合わせて 55 作品がすべて収録されている。



平成 26 年度総会・作品講評会・懇親会開催

開催日：平成 26 年 2 月 22 日

ホテルグランヴィア京都において平成 26 年度総会が開催された。それに併わせて作品講評会と懇親会も開催された。

■ 総会

15 時より、会場は金葉の間（3F）で行われた。今回の総会では、会則の改正から始まり、組織の変更、会計の明確化等の改革が提案され、会の運営に会員が積極的に参加できる体制が作られた。さらに、従来発行されていた会報の内容を年 6 回発行の「倶楽部だより」と年 2 回発行の「会報」の 2 つに分けることが報告された。これらの冊子の詳細についてはすでに発行されている倶楽部だより第 1 号に掲載されている。総会の出席者は 32 名（内、委任状 19 名）で全会員の半数を超え、会は成立した。

■ 作品講評会

今昔の間（3F）に会場を移して講評会が行われた。作品を持ち寄ったのは 10 名。中には大きなトランクに 4・5 個の作品を詰め込んで運んできた会員もいた。次々と出される作品について作者は簡単な（あるいは長すぎる）説明を述べた後に、質疑討論が活発に行われた。その間、この会場では、次の懇親会も予定されているため、ホテルの会場係の方々が遠慮がちに、黙々とテーブルの準備をされていた。

■ 懇親会

作品講評会と同じ、今昔の間（3F）で行われた。出席者は 17 名、バイキング形式がとられた。会員持ち込みの自慢の器に料理が盛られた。土曜日のお忙しい中、会場まで来て下さった料理長の“料理と器”のお話で宴が始まった。乾杯の後は、お酒と料理を頂きながらの歓談で、楽しいひとときを過ごした。



会員便り

展覧会カレンダー

平成 26 年

- 11 月 18 日 ~ 11 月 23 日
吉田 貢 作陶展 — 穴窯の世界 —
ドイツインギャラリー 宇（千葉県松戸市）
吉田 貢
- 11 月 25 日 ~ 11 月 30 日
綾土塾 Ceramics Exhibition 3
ギャリエヤマシタ 2 号館 2 階（京都市）
吉田 貢, 寺西 健二
- 11 月予定
京都・やきもの倶楽部 第 2 回作品展
清水焼の郷会館（京都市）
京都・やきもの倶楽部主催
- 7 月予定
吉田 貢 個展 — 自然釉・焼き締めの
普段使いの器 —
カフェ&ギャラリー・アール茶房
（東京都府中市）
吉田 貢
- 7 月 26 日 ~ 7 月 27 日
第 13 回 塊やきもの塾 作陶展
id Gallery（京都市）
片岡 俊彦
- 5 月 15 日 ~ 5 月 20 日
宮崎まさのり 第 4 回 切り絵象嵌陶展
ギャラリー 象鯨（京都市）
宮崎 正制

平成 25 年

- 11 月 27 日 ~ 12 月 1 日
宮崎まさのり 第 2 回 切り絵象嵌陶展
ギャラリー 遊・日本橋（東京都中央区）
宮崎 正制
- 9 月 25 日 ~ 9 月 29 日
World Peace Art Exhibition 2013 in Kiev
ウクライナ芸術家協会展示館
（ウクライナ キエフ市）
宮崎 正制

編集後記

- 9月21日～9月29日
アートギャラリー 2013
文化パーク城陽（京都府城陽市）
増田 淳三（入選）
- 9月18日～9月22日
京都・やきもの倶楽部 第1回 作品展
京都市勧業館 みやこめっせ
美術工芸ギャラリー（京都市）
京都・やきもの倶楽部主催
- 8月10日～8月11日
第12回 塊やきもの塾 作陶展
OPT GALLERY（京都市）
片岡 俊彦
- 5月23日～5月28日
宮崎まさのり 第3回切り絵象嵌陶展
ギャラリー 象鯨（京都市）
宮崎 正制

凡例

- 開催期間
- 展覧会名
- 展覧会場（開催地）
- 出品者名（入選、入賞）

京都・やきもの倶楽部が発足してから6年が過ぎました。私は昨年の作品展で実行委員に入らせていただき、今年度からは新たに発足した運営委員会の一員として倶楽部の運営に参加しています。それまでは、一般の会員としてやきもの倶楽部を見ていたのですが、その運営に関わることになって、倶楽部として色々な問題があることが判るとともに、「倶楽部を良くしていこう」という皆様の熱意を感じ、編集委員をお引き受けしました。

この会報は、本誌巻頭言に森田会長が書いておられるとおり、陶芸を通して会員同士の結束を固めるための重要な手段と考えられます。この第15号より装丁を一新し、その内容についても皆様に興味をもってご覧頂けるように“計画的”編集を心掛けてまいります。今号は初めての試みということもあって、予定したコラムですべての原稿を集めることは叶いませんでしたが、次号からは余裕を持って編集いたしますので、執筆にご協力下さいますようお願い申し上げます。

本号にも掲載いたしました「第1回作品展」の新聞掲載記事にありますように、「陶芸 プロ・アマ“競演”」をこの倶楽部の理念として、世界に羽ばたく陶芸集団を目指しましょう。

（編集委員 片岡俊彦）